

留学生通信 38・平成25年3月17日

日本・母国の懸け橋となれ日本語留学生スピーチコンテスト

第13回語学留学生による日本語弁論大会

主催・関東甲信越地区日本語学校連絡協議会

さいたま市・埼玉県立埼玉会館で2月20日に開催

◆関東甲信越地区の語学留学生6カ国15人が挑戦

一昨年3月11日の東日本大震災を克服して、「第13回語学留学生による日本語弁論大会」がさる2月20日（水）に、関東甲信越地区日本語学校連絡協議会主催の下、法務省、外務省、文科省、埼玉県、さいたま市、テレビ埼玉、埼玉新聞、入管協会、全国おかみさんの会など関係各機関・団体の後援を得て、さいたま市内の埼玉県立埼玉会館で開催された。全国日本語学校連合会（J a L S A）加盟校など多くの日本語学校関係者の協力を得て開催された大会には6カ国15人の留学生が出場し、会場に駆けつけた仲間の留学生・先生ら約300人からそれぞれに盛大な声援が送られた。

一次の書類選考を経て弁論大会に参加したのは、千葉、埼玉、神奈川・茨城、栃木の5県の日本語学校・専門学校からやってきた中国・韓国・カザフスタン・ベトナム・ミャンマー・ネパールの留学生たちだ。出場者は日頃の日本語研修の成果を競ったが、信州大学大学院の坂本保富教授を委員長とする審査委員の厳選な審査の結果、以下の8人が受賞の榮譽に輝いた。

【外務大臣賞】栃木・国際情報ビジネス専門学校の中国留学生、曲柏岩（キョク・ハクガン）さん。【文部科学大臣賞】神奈川・翰林日本語学院の韓国留学生、朴現燮（パク・ヒョンソプ）さん。【法務大臣賞】千葉・双葉外語学校の韓国留学生、金町明（キム・ジョンミョン）さん。【埼玉県知事賞】埼玉・東京日本語学院の中国留学生、辛延丹（シン・エンタン）さん。【さいたま市長賞】千葉・朝日国際学院の中国留学生、門富楽（モン・フラク）さん。【入管協会賞】茨城・水戸国際日本語学校のミャンマー留学生、ナウ・メイ・タオさん。【埼玉新聞社賞】神奈川・横浜デザイン学院のベトナム留学生、グエン・ティ・ハインさん。【テレビ埼玉賞】千葉・市川日本語学院のカザフスタン留学生、コイチュベコバ・アディヤさん。

スピーチ内容は、日本語学校の語学習得を通して感じた日本観、さらにはア

アルバイト生活を通して得た日本人の社会・文化観についての率直な印象を語り、われわれ日本人自身が気づけなかった貴重な視点や提言が数々披歴された。国家と民族の違いを越え、人の心に直に響く内容のある素晴らしいスピーチで、聞く人の心を揺さぶる場面も再三見られた。同時に、留学生の活躍は、日本語学校・専門学校の先生方の日頃の日本語教育の成果でもあり、今回紙一重の差で受賞を逃した7人のスピーチと、急きょ帰国のため大会に出席できなかった留学生1人の分も最後に含め、計16人全員のスピーチ内容をご紹介します。

◆留学生に分かりやすい日本語を使うと留学生は増える——チョモルリグさん

コンテストの1番目は、埼玉の「中央情報専門学校」の中国・モンゴル留学生、朝木日力格（チョモルリグ）さん。テーマは『通じる言葉』。チョモルリグさんは日本に留学して実感したのは、アルバイト先などお店で使う敬語の難しさだった。『袋はお入りになりますか』と言うより、『袋入ります』の方が、外国人にははるかに分かりやすい」のに、という訳だ。

そこで、チョモルリグさんは「外国人に対するサービスを見直すと、将来、二つのいい影響があります。一つは日本の留学政策です。日本は留学生を30万にする目標がありますが、日本のサービスが外国人にとり分かりやすくなれば、留学生は安心して日本に来られ、今よりもっと増えると思います」という。

チョモルリグさんはさらに「コミュニケーションで一番大切なのは『言葉』です。日本人は難しい言葉で話したり、外国人だとわかると『外国語、無理』と逃げてしまう人が多いが、日本人が分かりやすい日本語を使う事ができれば、外国人と日本人の距離はもっと近くなります。お店のサービスから易しい言葉に変えれば、いつか大きな波となり日本全体へと広がるはずですよ」と提言した。

◆わがままが消え、自活生活が支える「日本の虹のような生活」——巖欣さん

2番目は、横浜市の「横浜国際教育学院」の中国留学生、巖欣（ゲン・キン）さん。テーマは『虹のような日本の生活』。巖さんは来日2年。アルバイトと勉強の日々だが「私にとって、日本の生活は虹のようです」と言う。

習慣や文化が違う日本での暮らしだが、得難い体験は「初めてアルバイトの給料をもらった時」に始まる自活生活だ。勉強と両立、掃除、炊事、全部一人。「給料と親からもらったお金は感じが全然違います。自分で稼いだお金で好きな物を買って、満足感が大きい。全部自分でやり、問題があった時、自分で解決しなければなりません」。バイトも「今辞めたら駄目だ」と考え直し続けた。

ある日、巖さんはアルバイト先のおばあさんから、生たらこを具にしたおにぎりもらった。中国では生ものは食べない習慣なので「以前のわがままな私だったら『おいしくない!』と言って、おばあさんの前で捨ててしまったかも

しません。おばあさんに『おいしい?』と聞かれて、私は『おいしい…』と答え、おばあさんが休憩室を出て行った後に捨てました」と言う。考え方が変わり「今の私は以前のわがままな私ではありません」と語る巖さんだ。

◆結論を出すより話し合い相手を理解し共に考える事が大切——金町明さん

3番目は千葉の「双葉外語学校」の韓国留学生、金町明（キム・ジョンミョン）さん。テーマは『私にとって最高のライバル』。金さんは来日1年。外交官が夢だが、学費稼ぎのバイト、勉強と現実の壁は高く「悩むほど無気力になった」金さんに「自信を取り戻させてくれた日本人の友」について語った。

友達は公務員を目指す「韓国が大好き」人間。韓国旅行で偶然知り合い、今年横浜で旧交を温め「楽しく心も体も癒された」金さんだが、夕方別れ際に、その友から竹島問題を聞かれたのをきっかけに、歴史、経済、社会など日韓間の諸現象を熱心に話し合ったが「結局、何の答えも出ませんでした」という。

しかし、金さんはこの時「相手と話して結論を出すより、話し合いながら相手を理解し一緒に考える事が大切だと教わった」。そして「お互いにある問題について関心を持ち、一緒に努力し一緒に進もう。そして相手が一番大変なとき手を差し伸べよう」という友の一言が印象に残ったという。金さんは「私は隣国の一市民として、今よりもっと良い日韓関係、良いアジア、良い世界を目指し、切磋琢磨していきたい。私が大変な時、機会と夢を与えてくれた日本は、私が好きな国というより、私にとって最高のライバルです」と締めくくった。

◆子供に是非善悪の判断力をつければ意見を持った人間になる——許澤寰さん

4番目は、神奈川の「飛鳥学院」の中国留学生、許澤寰（キョ・タクカン）さん。テーマは『盲従』。許さんは、「iPhone」や有名ブランド、「赤信号、みんな渡れば怖くない」と中国で問題になっている信号無視などの例を挙げ、盲従しやすい大衆心理を批判、自分の判断力や意見を持つことの大事さを語った。種々の例を挙げた許さんは「本当の人間になりたかったら、まず必要なのは盲従しないで、古い方法や制度をくつがえす心を持つことだ」とアメリカの教育家デール・カーネギーの言葉を引用した。また中国の教育家、韓愈が「是故弟子不必不如師，師不必賢于弟子。必ずしも先生が生徒より賢いとは限らないし、生徒が先生よりできないとは限らない」と述べた事にも言及し「私は本当にそうだと思います」と同感の意を示した。

来年、大学で教育学を目指す許さんは「先生は知識だけではなく、人生を歩む生き方を教える事が本職です。先生の肩にかかっているのは国の未来の子供たちです。私の知識が足りなくても、世の中の善悪や是非を判断する力をつけさせたい。そうしたら生徒が個性的になって、創造力も伸びます。他人に惑わ

されず、自分の意見を持てる人間になるのではないですか」と抱負を語った。

◆お詫びと感謝は人を豊かに幸せにする——コイチュベコバ・アディヤさん

5番目は千葉の「市川日本語学院」のカザフスタン留学生、コイチュベコバ・アディヤさん。テーマは『魔法の言葉』。アディヤさんの夢は通訳になることだが「私たち人間が使う沢山の言葉の中で忘れてはいけない言葉、シンプルだが大きな力がある魔法の言葉、それはお詫びと感謝の言葉です」と語り始めた。

コイチュベコバさんが来日し驚いたのは「日本人の礼儀正しさ」。店でも道でも「ごめんなさい」「すみません」「ありがとう」の言葉をよく聞いた事だ。だが「カザフスタンではお詫びと感謝の言葉が非常に少ない」と言う。手伝っても知人からお礼の言葉も無く「悲しく感じる時がある」という。

日本では、このお詫びと感謝の言葉を毎日耳にして「私はとてもいい気持ちになりました」と言うアディヤさん。「何故なら、こうした言葉は人の心に安らぎを与えてくれます。この魔法の言葉を使うと、相手も自分の気持ちも幸せになる。この言葉を使えば使うほど心が豊かになり、国と国の関係、人間と人間の関係などももっと優しくスムーズになります」と語りかけた。最後に、通訳を志すアディヤさんは「言葉を翻訳するだけでなく、言葉の持つ意味や日本人の心もカザフスタンの人たちに伝えたい」と語り終え、大きな拍手を浴びた。

◆夜空の星のように夢は叶わぬかもしれぬが、前へ進みます——曲柏岩さん

6番目は栃木の国際情報ビジネス専門学校の中国留学生、曲柏岩さん。テーマは『理想の空』。少年が青年へと成長する心理過程の綾を空との対比で語った。曲さんは「空を見上げるのが好き。雲がゆらゆら空に浮かんでいるのを見てると吸い込まれていく感じがして、何時間も眺めます」と空への慕情を語る。

そう、曲さんは「楽しい時も悲しい時も、空を見上げる癖がある」少年だった。「学校が終わり、夕日に染められた角煮のような雲を見つめながら、家の晩御飯を想像し、帰り道で走っていた頃は幸せの気持ちが一杯」になり、「僕の夢は宇宙戦士になって宇宙で飛び回るんだ！」と言いながら空を指指した。

中学に入ると「理想を持ち始め、晩御飯よりも気になる女の子の事を考えながら空を見上げる事が多くなり、彼女と一緒に家庭を作るのが俺の夢だぜ！」と希望を夜空に描くようになった。気づくと夜空のつき合いが多くなり、学業のストレスが増えた。でも夜空の星を見上げるとストレスが解消された。「年と共に夢は変わるかもしれない。それは星のように手が届かないかもしれない。だからこそ前へ向って進みます。夢が叶えられた人は幸せです。その時見上げる空はどのように見えるのだろう」と夢を空と青春の日々に託す曲さんだった。

◆ひらがなの手紙——ゲン・ティ・ハインさん

7番目は、神奈川の「学校法人石川学園 横浜デザイン学院」のベトナム留学生、ゲン・ティ・ハインさん。テーマは『ひらがなの手紙』。ハインさんは、日本語が解らないハインさんを励ました、日本の“母”との手紙の交流を語った。

ハインさんは、二年前の日本での研修生活から話した。叱責され慣れぬ職場。孤独感に悩むハインさんを救ったのが、年配女性から貰った一通の手紙だった。

「はいんさんへ、しごとやせいかつなどたいへんだとおもいますが、がんばってね。もしはなしたいことがあったら、わたしにてがみをかいてください。平仮名は漢字と違い、温かい優しい感じだった。「ほどたさんへ、てがみ、ありがとうございます。わたしはとともうれしくてかんどうしました。ほんとうにありがとうございます」と返信。手紙交換が始まった。贈本には平仮名が振られていた。「辛いことがあったら何時も助けてくれて、心からホドタさんを母のように思い……本当の家族が側にいるような暖かい気持ちになりました」と回想する。

日本が大好きになり帰国したハインさんは去年10月、日本語留学生として再来日。「将来は日本とベトナムの架け橋になりたい。今日のこのスピーチが私のホドタさんへの感謝の手紙です」。ハインさんは今も手紙を大切に保管している。

◆やる気があれば、出来ない事は無い——シャハ・プラキリティさん

8番目は、埼玉の「与野学院日本語学校」のネパール留学生、シャハ・プラキリティさん。テーマは『日本でできるようになったこと』。プラキリティさんの夢は母国ネパールに帰って日本語教師になる事。その努力の課程を語った。

ネパールでは日本語志望は少なく、勉強はわずか二カ月。来日直後は日本語がさっぱり解らず、帰宅に「50分の所を5時間もかかった」。カースト制度で清掃をしなかったが、日本ではした。「やる気があれば出来ない事は無い」と教訓も得た。「一回、二回、三回間違えても、四回目には上手くなる事も分かった」と言う。仕事も「勉強のため」と思うと新しい事を一杯習えた。「毎日会話が出来、勉強も出来、使うともっと上手くなる事も知りました」と何事も前向きだ。

別な教訓は「練習すれば練習するほど上手くなる」。1年間は話が出来ず「もう辞めて帰ろうかな」と何回も思ったプラキリティさんだが、今やレストランの仕事で「いくら疲れても何となく楽しい」と言う。「日本の文化に馴染んで日本人の気持ちが解るようになりました」と成長著しい。「前に失敗した事も今は日本の生活で全部出来、前は出来できなくて涙が出たが、今は出来たら嬉しくて涙が止まらない。目標は国へ帰り日本語の先生になる事です」と胸を張った。

◆一生懸命に工夫してお婆さんの心を掴み、触れ合いに見事成功——于闐さん

9番目は神奈川の「岩谷学園テクノビジネス専門学校」の中国留学生、于闐

(ウ・チョン)さん。テーマは『老人ホームで学んだこと—こころのふれ合い』。于さんは、勤め先の横浜の老人ホームでの感動的職場体験を話してくれた。

初めて職場に、于さんは期待に胸がふるえたが、ホームには認知症と寝たりきりの老人ばかり。「お早うございます。私はウチョンと申します」と挨拶しても返事は無く「バカ、あっちへ行け」と食べ物も拒否。于さんは恥ずかしさで真っ赤になり、自信を失くしかけた。ところが、部屋を出て廊下を歩くと、他の部屋から家族が花を見せながら歌を歌い、お年寄りの笑う声が聞こえた。于さんは「この光景を見て涙が溢れた」と言う。一生懸命考えた于さんは、休憩時間に「海は広いな、大きいな…」と歌うと、お婆さんに笑顔が浮かんだ。

花見もマッサージもした。するとひと月後、お婆さんが「ウちゃん。午前中いなかったね。寂しかったよ」と声をかけてきた。于さんは「心のふれ合いができたのです。私は人生の感動がいただけるこの仕事が好き」と誇らしげだ。

于さんは今、日本語習得後、介護を学び、ケアマネージャーの資格を取り「認知症の老人対応を研究し、人々の幸せに貢献したい」と胸を張って生きている。

◆国の発展は子供達の手に、子供支援を組織し力に——ナウ・メイ・タオさん

10番目は、茨城の「水戸国際日本語学校」のミャンマー留学生、ナウ・メイ・タオさん。テーマは『子どもたちの未来』。メイさんは、世界の子供たちを守るために、先ずミャンマーの子供達を援ける組織作りの夢を語った。

メイさんは「ミャンマーが何故発展できないのか？大学で学び体験もし、原因は子どもの教育水準の低さだ」と悟った。町の子は教育の質も良く豊かだが、田舎は生活が苦しく教育を受けられず「格差があって国は発展できない」と言う。ボランティアで田舎に勉強を教えに行ったが、炊事や兄弟姉妹などの面倒を見るために「勉強したくても来れない」現実があった。内戦で紛争地域の子供達は、紛争の度に逃げ回り生活が安定せずに勉強ができない。結局「子供達は武器を持ち、危なくて先生もよりつかない」。政府の援助もない。大学の友人3人と子供達に英語や聖書を教えに紛争地に行ったが、帰還を余儀なくされた。

こうした体験を通して、メイさんには「一番大事な夢ができた。国の発展は子供達の手にある。私はここを卒業したら、大学院のマスターを取り、自分で子供達を助ける組織を作り、子供達の力になりたい。私が見てきた事、習った事を子供達とシェアしたい。皆さんも手伝って下さい」と参加者に呼びかけた。

◆国を分ける「線」よりも私たちが繋ぐ「縁」を大切にしたい——門富楽さん

11番目は千葉の「朝日国際学院」の中国留学生、門富楽(モン・フラク)さん。テーマは「縁」。門さんは領土問題を巡る日中間の動きに関連し、人と人が縁で結ばれているように「国と国との縁を大切にしませんか」と呼びかけた。

昨年秋、中国の大連から日本の大学院で美術を勉強するために日本語を学ぶ門さんに、お母さんから突然電話がかかった。尖閣列島問題が盛んに報道され「若者が日本製品を壊したり、投石したり、物を焼く映像が世界中に流れ、母は『あなた大丈夫、』と心配して電話をくれたのです」と語る。門さんは「日本でも繰り返し流れたが、誰も私に嫌なことを言う人はいません。心配しないで」と伝えた。門さんら中国留学生は「留学生まで同じ気持ちだと思わないで欲しい。せつかくの縁で結ばれた国と国との温かい繋がりを望んでいる」と語る。

領土領海をめぐる争いは歴史上、世界中で起こり、世界地図には必ず国境線が引かれているが「宇宙飛行士が宇宙から見る地球は、海の青と山の緑でできた一つの美しい丸い星だそうです。国を分ける『線』よりも、私たちを繋ぐ『縁』を大切にしたい。皆さん、この『縁』をもっと大切にしませんか。それが人と人、国と国が争わないための、小さいが大きな一歩になるはずです」と訴えた。

◆明言せずとも相手が分かってくれると思うのが日本文化の特徴—曹永民さん

12番目は、千葉の「KEN」日本語学院」の韓国留学生、曹永民（ジョ・ヨンミン）さん。テーマは『日本のコミュニケーション』。曹さんは「イエス・ノー」がはっきりしない日本語の使い方の難しさを体験を交えて語ってくれた。

曹さんは小学生の頃。漫画の『ドラゴンボール』を全巻揃え「漫画や映画で見た日本は文化も考え方も似ていて韓国と近い国だ」と思い、何度も旅行し「日本の美しさと親切さを見て、もっと日本が好きになった」と言う。一昨年26歳で日本に留学したが「生活してみると困った事も沢山ありました」と率直だ。

日本語の使い方の難しさ。曹さんは「美しいとさえ思った日本のコミュニケーションは、実際はイライラさせられ大変でした」。例えば「いいです」は「良いか、悪いかははっきりしません」。コンビニで弁当を買い、店員に「温めますか。」と聞かれ、「いいです」と答えたが、店員は温めずに袋に入れてしまった。「おかしくないですか。『いいです』には『NO』の意味もあるんですね」と言う。

曹さんは「はっきり言わなくても相手が分かってくれると思うのが日本のコミュニケーションと聞いたことがあります、これが日本文化の特徴だと思うので、もっと慣れなければ」と、今では日本語の特徴を立派に掴んだ曹さんだ。

◆人間関係を柔らかくする効果が素晴らしい日本語が大好き！——辛延丹さん

13番目は、埼玉の「東京日本語学院」の中国留学生、辛延丹（シン・エンタン）さん。テーマは『日本語に魅かれて』。辛さんは、日本語を学ぶために留学した動機をアニメのエピソードも含めて面白おかしく語ってくれた。

辛さんは日本のアニメを見て育ち、大学の専攻も優しさに魅かれて憧れの日本語に決め、短歌を勉強した。ある日、図書館で「かくとだに えやはいぶき

のさしも草 さしも知らじな もゆる思ひを」と本を読んでいると、本の中から出て来たようなイケメン青年に出会い、片想いに陥った。「そうだ。これが私の気持ちだ。恋という言葉も使わず、31文字で恋の気持ちを伝える。私はそういう遠回しの表現が大好き」と辛さん。「人を傷つけることなく自分の言いたいことが言え、人間関係を柔らかくする効果が素晴らしい。……世界の人々と仲良く暮らすにはこの気持ちが大事。私は日本語が好きです！」と誇らしげだ。

尖閣問題では帰国を促されたが「日本人は冷静な民族なので平気。私は日本を信じています」と答えた辛さん。「帰国して教師になり、美しい日本語や体験した日本文化を中国の若い世代に伝えたい。相互理解の道のりは長いが、私が決めた人生です。何があっても絶対諦めないで前に進みます」と頼もしい。

◆歴史・文化守る国はグローバル化でも他国の長所を吸収できる——朴現燮さん

14番目は、神奈川の「翰林日本語学院」の韓国留学生、朴現燮（パク・ヒョンソク）さん。テーマは『日常の中で伝統文化を守ることの大切さ』。滞日1年。体験的伝統・文化論を語った朴さんは、留学初日「道にゴミは無く、綺麗で落ち着いた街の雰囲気、新しい生活を始める事にウキウキした」と言う。

3月経ち、朴さんは電車内で着物姿のおしゃれな人を見かけ「不思議な気持ちになった」という。何故なら「韓国では伝統的な韓服を着ている人を見る機会が無く、若者がいつからか韓服姿を恥ずかしいと思うようになっていたから」だ。夏祭りでも「浴衣姿で楽しむ大勢の若者を見かけた。日本に来て半年『国の伝統文化を古くて恥ずかしい』と思っていた私自身が恥ずかしく感じられた瞬間でした。自国の伝統文化を守る大切さが日本の生活で分かった」と言う。

朴さんは「今の韓国は国の歴史、文化を考えず、皆がしている事を真似しながら先へ先へと走っています。『根が丈夫ではない木は大きく成長できない』と言われるが、国も同じです。歴史や文化が守られている国は世界化、グローバル化の中でも他国の良い所だけを吸収できます。何故ならしっかりした基準や価値観が国の歴史の中に見本としてあるからです」と伝統・文化論を総括した。

◆いつか中国も日本人のように人に思いやりと配慮を示せたら——田麗娜さん

15番目は、埼玉の「浦和国際教育センター」の中国留学生、田麗娜（デン・リナさん）。テーマは『日本人が教えてくれたこと』。田さんは、日本人を桜の花に譬（たと）えて、独自の日本人論を展開して注目された。

田さん「日本人は一週間で満開になり、あっという間に散る桜が何故そんなに好きで国のシンボルと思うのだろうか」と思っていた。だが来日し「少しずつ分かるようになった」。先ず到着した成田空港の「綺麗さと静かさ」だ。人は沢山なのに静かに順番を待ち割り込まない。出迎えた先生は「日本人が人を思

い、他人に迷惑をかけないことを当然のマナーとしているから」と。納得した。

学校の寮に着いた田さんは、早起きして町を歩き通りの狭さと渋滞の無さに驚いた。「中国は人が多く小さい町でも渋滞する」が、日本人は信号を守り順番を崩さない。そこで田さんは考えた。「桜の花びらは小さくてそれほど綺麗ではないが、集まったら本当に美しくなる。短くても咲いている間はお互いに気を遣い思いやっている。日本人が桜への思いを抱く理由です。中国の国花『牡丹』は高貴で綺麗ですが、牡丹はいつも寂しく孤独に咲きます。いつか中国人も日本人のように人に思いやりと配慮を示したら良いと思う」。見事な観察眼だ。

◆日本の若者に「がんばれ」という言葉を贈りたい——ニン・イースイさん

帰国のためにコンテストに参加できなかった宇都宮市の「アティスインターナショナルアカデミー」のミャンマー留学生、ニン・イースイさんのテーマは『「がんばれ」という言葉を贈りたい』。お別れのエールだ。イースイさんは、マンダレー大学に入学する時の友人の勧めで一昨年10月に来日したが、一時は同大学への合格も危うかった。大学への合否は高校2年生の最後の試験で決まるため、皆必死に勉強するが、イースイさんは「明日できることは今日やらないタイプで勉強をしなかった」からだ。試験が近づいた頃、父親から「大学はあきらめた方がいい」と言われた。「頑張れ」と励ましを期待していた父親から「能力がないからだ」と烙印を押されたような気がして大泣きし、逆に決心した。「絶対に合格する」と。イースイさんは頑張り第一志望の大学に見事合格。

来日したイースイさんは、日本人が「頑張れ」とよく言うのに驚いた。しかし「若者にはその頑張りが感じられない」とも言う。アルバイト先の居酒屋で働く大学生はすぐ休む。ひ弱さばかりが目につく。イースイさんは「日本の若者に『頑張れ』という言葉を送りたい。ミャンマー人が頑張っているのは『日本みたいな国になりたい』と見習っているからです」と書き残して帰国した。

◆留学生一人一人が、相互理解を深める民間親善大使——坂本保富審査委員長

登壇者全員のスピーチが終わった後、審査員を代表して審査委員長の坂本保富・信州大学大学院教授が全体を講評した。坂本教授は「非常に丁寧で的確に日本語をマスターされた努力が素晴らしい。内容、表現力も豊かで、甲乙つけ難い内容でした。鋭い観察力、分析する力、表現する力。日本人が当たり前で思い、見過ごしている事を、日本の文化とはどういうものか、鋭く的確に捉えていた。異国で、異文化の中で、自国の文化を学び直す。これも素晴らしい。希望を持ち、顔が明るく、目も輝いている。今日のお話は日本の学生に聞かせたかった。地球は1つの丸い文化です。人と人との地道な交流が、平和で理解しあえる世の中を作る。そのための、皆さんお一人お一人が民間親善大使です。

皆さんは夢を持って生き生きと生きている。今日の皆さんの活躍を日本の大学生、大人、親たちに見せてあげたかった。見せて惰眠をむさぼっている教授たちに活を入れたいほどでした」と述べ、留学生全員の日本語習得力を高く評価して、スピーチコンテストを終えた。